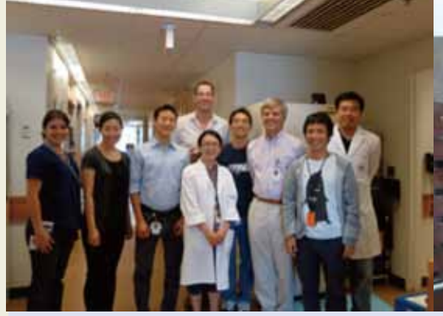
Harald Jueppnerグループ

ラボからの風景（エーテルドーム）

ラボからの風景（ダウンタウン）

海外体験記

ボストンでの2年間の滞在

大学院ヘルスバイオサイエンス研究部
栄養医科学講座分子栄養学分野 講師
瀬川 博子（せがわ ひろこ）

２００８年９月より２０１０年９月までの２年間、アメリカ合衆国マサチューセッツ州ボストンにあるマサチューセッツ総合病院（Massachusetts General Hospital; MGH）、Endocrine Unit にて、客員研究員、ハーバード大学医学部客員助手として滞在させていただきました。ボストンは、アメリカで最も歴史の古い街の一つであり、市内及び周辺地域には多くの大学があり、教育の中心地であるとともに、医療の中心地でもあります。また、気軽に世界的に有名な交響楽団の演奏を聞くことができるすてきな街です。そんなボストンで２年間研究中心の生活を過ごしてきました。ＭＧＨはアメリカ東部で最大・最古の病院であり、ハーバード大学関連医療機関の中でも中心的な病院です。最新の情報と歴史の重みが混在し、非常に刺激的な場所でありました。私のラボの席からは、世界初のエーテル麻酔による外科手術が施行されたエーテルドームが見えました。

副甲状腺ホルモン（Parathyroid hormone; PTH）研究に関して歴史のある MGH Endocrine Unit は 20 数名の PI（Principal Investigator）のもと様々な国の人たちが集まり、大所帯で活動していました。私は、ＰＴＨ受容体を同定された、小児腎臓内分泌が専門のＨａｒａｌｄ Jueppner 教授のもと勉強させていただきました。この２年の生活の中で、研究以外のことも多く学ぶことができたと思います。ほぼ、ラボとアパートの往復をしていましたので、アメリカの各地に旅行に行くということなどは皆無の生活をしていましたが、時には、クラシック音楽を歴史あるホールで、普段着のまま聞くことができたり、クリスマスには、ボストンバレエを見に行ったり、感謝祭には、アメリカ人の友達宅で伝統的な料理をいただくことができたことなどもかけがえの無い思い出になりました。

２年間の滞在で最も感じたことは、国、文化が違えども、理解できるのは、やはり人柄なのだと強く感じました。これからも、この２年間で培った人とのつながりを大切にしたいと思います。また、これまで当たり前だと思っていたことが（生活面においても、研究面においても）、当たり前ではなく、様々なことに感謝しなければならないと感じたことでした。今回の２年間の海外留学の機会は、全てこれまでご指導いただきました宮本賢一教授、武田英二教授、金井好克教授（大阪大学教授）や先輩、同輩、後輩の皆様と築き上げました成果によるものであります。ここにお礼申し上げます。今後ともご指導よろしくお願いいたします。

シンフォニーホール

読者の言葉

1：工学部の特集がほしいです。
2：医学、薬学に関する記事が多いようですね。とりあげやすいからだと思いますが、他の学部の記事もとりあげてほしいです。特に工学部機械工学科の記事は冬、春にもなかったと思うのですが…

【回答】
ご意見どうもありがとうございます。徳島大学には5つの学部があり、その内訳は総合科学部、医学部、歯学部、薬学部そして工学部です。『とく talk』ではそれぞれの記事をこの5学部に割り当て、順番に回しております。従って、それぞれの学部の取り上げられ方には差がありません。しかしながら、各学部の規模は様々で、学科、講座、研究室の数となると、かなりの差があります。また学生数も大きく異なります。このような事情から、保護者の方々にとってはお子様が通われている学科がなかなか取り上げられないといった事がどうしても起こってしまいます。このような事情も徳島大学全体の広報誌という特質としてご理解いただければ幸いです。

掲載記事一覧の見出しが分かりにくい。ページで書き出して置いてくれた方が一目で分かりやすいと思う。

【回答】
ご指摘どうもありがとうございます。『とく talk』は総ページ数が30ページに満たない冊子です。目次のページを独立させるほどの規模ではありません。そのため、目次に相当するものは表紙に置くことになります。そこで、今回から表紙に記載する記事項目の文字を従来のものより大きくし、執筆者等の所属の表記法を統一しました。これにより見づらさは改善されると思います。所属の名称に関してですが、これらは徳島大学としての正式なものですので、省略することができません。現在徳島大学では大学院の研究部を主体に運営されているため、以前のような「○○学部教授」等の表記をすることができません。この点はご理解をいただければ幸いです。また、表紙では各自のコース名・講座名等を省略して表記していますが、正式な名称はそれぞれの本文をご覧ください。

マレーシアから来たリサと申します。現在は機械工学科の２年生で一生懸命に勉強しています。

マレーシアは東南アジアにある国で、３つの人種で構成されています。日本とは異なり、四季はなく1年中蒸し暑いです。私の出身のジョーホールという州は、マレーシアの南にあり、シンガポールの近くにあります。

What's happening?

留学生滞在記

夢のはじめの一歩

工学部 機械工学科2年
ヌルファルリサ ビンティ ジノディン［マレーシア］
Nurfarlysa Binti Zinodin

去年の3月21日に、将来の夢を実現させるため日本に参りました。４月1日に徳島大学に入学し、新しい生活が始まりました。自国を離れて、外国で一人暮らしの生活を始めることを自分で決めました。両親は、私がしたいことに反対したことは、一度もありませんでした。でも、世の中はいつも安全だとは言い切れないので十分気を付けるように言いました。子供の頃から留学を希望していましたが、日本ではありませんでした。ドイツへ行きたかったのですが、姉の「日本は近いし、宗教に囚われない国」というアドバイスで、日本に来ました。もう1つの理由は、マレーシアではほとんどの人が英語が話せるので、何もかも皆と同じ程度になりたくないと思いました。そこで別の技能を手にするために、挑戦することにしました。今、日本を選んだのは間違いではないと思っています。とてもいい国だし、高い技術を持っているので勉強するのに一番適切なところだと思います。

私は日本に来る前、マレーシアで2年間日本語を勉強しました。マレーシア政府による日本留学特別コースというプログラムが実行されていました。当時からこのプログラムは試験がいろいろあって、日本へ行くために一生懸命頑張りました。日本に来た当初は、日本の生活にまだ慣れていませんでしたから、大変で寂しく感じました。例えば、日本ではごみは分別しなければなりません。でも、マレーシアではしていなかったので難しかったです。これは今も難しいです。それから、日本では食べるとき、皿を持って口のそばに近づけて食べます。でも、これはマレーシアでは行儀の悪いことです。違う文化や習慣の人々の中で生活するのは初めのうちはどんなことも大変でした。勉強もあまり理解できなくて、時々泣きそうになったし、諦めそうになったこともあります。でも、マレーシアの先輩や日本人の友達にいつも助けてもらってだんだん慣れてきました。

この1年を通じて、いろいろな忘れられないことを体験し、日本の文化と習慣についての知識も身についてきました。そして、日本にいる限りいろいろないい思い出を作ろうと思っています。これからも、勉強や生活に精一杯頑張りたいと思っています。